様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ８ 月 ３０ 日現在

機関番号：３２６１８
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2014～2017
課題番号：２６７７００８６

研究課題名（和文）佐藤春夫旧蔵資料による文壇ネットワークの解析

研究課題名（英文）Studies on Pre-war Japanese Authors' Connections through the Analysis of Haruo Sato's Former Collection

研究代表者
河野　龍也（KONO, Tatsuya）

実践女子大学・文学部・准教授

研究者番号：２０５１１８２７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、佐藤春夫宛書簡の分析を通じて、戦前の作家たちの交流の実態を明らかにした。彼の業績は、1910年代から40年代に及ぶ日本の近代精神の展開を深く理解するための示唆に富む。台湾・福建における春夫の国際活動も重視し、郷土史料や証言の収集に努めた。研究成果は展覧会・シンポジウム・書籍・ニュースを通じて発信され、特に現地の文化遺産の保護に貢献することで、日本文学に対する海外の研究者の関心を喚起した。

研究成果の概要（英文）：This study clarified the reality of pre-war Japanese Authers' personal connections through the analysis of the letters sent to a well-known writer, Haruo Sato. By focusing on his work, we could deeply understand how Japanese developed their "Modernized Mind" from 1910s to 1940s. This study also appreciated his international activities in Taiwan and Fujian province (China) and made an effort to collect materials and memories of local history. The results of research were released through exhibitions, symposium, publications and news on mass-media, which contributed the protection of cultural heritages in these areas, and caused scholars abroad more interested in Japanese literature.

研究分野：日本近代文学

キーワード：日本文学　近代文学　台湾　中国　植民地　旅行記　草稿研究　国際情報交換

１．研究開始当初の背景

(1)「アジア文学」研究の気運

今世紀に入り、「外地」文学の実態や翻訳書の流通状況に研究者の関心が寄せられるようになり、日本近代文学研究の分野でも、研究対象を改めて「アジア文学」の観点から再検証しようとする気運が高まっている。その中で、戦前の中国・台湾の文学者と深いつながりを持ち、世界初の『大魯迅全集』(1937)出版など、文化交流に尽力した佐藤春夫の忘れられた功績が注目を集めるようになった。

本研究は、戦前の文壇において人脈の要衝のごとき役割を演じた佐藤春夫の活動状況を明らかにし、将来のアジア史的観点による日本文壇史構想の基礎固めを企図して計画されたものである。

(2) 異分野間で乖離した評価

90 年代までの日本文学研究では、佐藤春夫は国策協力的な「戦争詩人」としての暗いイメージを引きずっていた。例えば坪井秀人は、日本の対外膨張政策を無自覚に肯定する春夫の姿勢を批判した（『声の祝祭』1997）。文学者の戦争責任に対する問題提起の重要性は今もって変わることはないが、国際交流面で果たした春夫の役割が、日本文学研究では長く看過されてきたことも事実である。

佐藤春夫を再評価する声は、90 年代の中国・台湾文学研究の分野から上がった。1920 年夏の台湾旅行に取材した春夫の作品に、アジアの「抵抗ナショナリズム」に対する深い共感を見出した藤井省三の業績がきっかけだった（『台湾文学この百年』1998）。

異分野間で、一作家の評価に正反対とも言える乖離があり、それが気づかれにくかった原因は、研究交流の不足にあると考えられた。それゆえ、佐藤春夫というテーマには、国際的・学際的な研究を促進する架け橋としての将来性が期待できた。

(3) 大規模な旧蔵資料の発見

2010 年以降、本研究代表者（河野龍也）は、遺族の了解を得て、未整理のまま残されていた佐藤春夫の遺品整理に従事することを許された。段ボール 12 箱に及ぶ未公開資料のなかに、デビュー当時から晩年に及ぶ作品の未定稿と、約 800 通におよぶ諸家からの書簡が存在することが判明した。特に書簡は、著名作家（堀口大学・芥川龍之介・谷崎潤一郎・太宰治など）や出版関係者のものを多数含み、大正昭和の文壇人脈の中枢の状況を伝える一級資料だった。

河野龍也は、2010 年採択の科研費研究課題「佐藤春夫肉筆資料の文献学的研究」（若手研究（Ｂ））の一環としてすでに分析作業を開始していたが、その成果を本研究で継承し、今後は情報公開に重点を置いて関係者との交渉を進める段階に入っていた。

(4) 実証研究の遅れ

従来の研究では、佐藤春夫の広汎な業績のうち、特定の要素だけを取り出してその可否を論じる性急な傾向があったことは否めない。国際学会での話題となる際も、断罪か称賛かという単純かつ極端な政治的判断を急ぐあまり、客観的な分析が不足していたように見える。この弊害は、基礎研究自体の未熟さに起因していた。新発見の旧蔵資料を活用することで、低迷した状況を打開する実証的な研究モデルを構築する必要があった。

２．研究の目的

(1) 研究基盤の整備

1998 年から 2001 年にかけて、『定本佐藤春夫全集』全 38 巻が刊行され、作家の業績の全貌が俯瞰できるようになった。にもかかわらず、研究に必要な基本情報を網羅した案内書は 1 冊も存在していなかった。広津和郎が「多面体」の才能と看破したように、佐藤春夫の場合、その多才さがかえって全体像を見えにくくしている難解さがあり、それが一般社会の関心を喚起するためのネックともなっていた。そこで本研究では、旧蔵資料の研究成果を取り込み、作家の業績や個性を一望できるような、資料的価値の高い書籍の企画・刊行を計画した。

(2) 近代精神の検証

「大逆事件」の犠牲者に哀悼の詩を捧げ、また台湾紀行文では植民地支配の矛盾を抉る鋭い批評精神を発揮していた佐藤春夫が、なぜ昭和期に民族主義やナショナリズムを鼓吹する「戦争詩人」への路を突き進んだのか。このテーマは一個の作家研究にとどまらず、日本の近代思想史に対する重要な問題提起を含んでいる。日露戦争後のコスモポリタニズム（世界市民主義）が、どのようなプロセスを経て民族主義と手を結ぶことになったのか。佐藤春夫をケーススタディーとして、日本の近代精神史を語る上では避けて通れないこの重要課題に取り組みたいと考えた。

(3)「外地」表象研究による国際交流

佐藤春夫の台湾旅行（1920 年）には当然台湾からも高い関心が寄せられていたが、現地ですら実証研究はほとんど成果をあげていなかった。また、同じ旅行中に対岸の福建省を旅して得られた春夫の『南方紀行』も、厦門では全く顧慮されてこなかった。中国の場合、租界における日本人の存在は長く分析対象とはならず、近年の上海研究の隆盛を除けば、その生活実態はいまだに研究上の大きな穴である。わずか 3 か月余りの台湾・福建滞在で、春夫に鋭い社会観察が可能だったのは、日本人・台湾人・中国人を含めて現地に優秀なアドバイザーがいたからだが、彼らの貢献を発掘し、正当に評価することで、現地の文学研究と郷土史研究に新視角をもたらしたいと考えた。

３．研究の方法

(1) 書簡の整理と解読

佐藤春夫宛書簡については、内容を通覧し、簡略な年代順のリストが完成していた。本研究においては、リスト化した書簡のすべてを写真撮影し、家族や文学者など重要度の高いものから順次翻刻作業を行った。内容の公表については関係者の利害を損ねないよう、新宮市立佐藤春夫記念館などに協力を仰ぎながら綿密に協議を進めた。

(2) 草稿・ノート類の分析

草稿・ノートの解読作業を通じ、作品の完成形では失われてしまった構想の原型を知ろうと努めた。本研究では、父豊太郎宛書簡に同封されていた初期詩篇の草稿や、第二次世界大戦末期から疎開先で使用していたスケッチブック、詩の構想ノートを主な分析対象にした。乃木希典の殉死、敗戦の衝撃など、日本人の近代的な倫理感覚が鋭く問われる場面での春夫の振舞いに注目し、彼の存在を近代精神史の流れに位置づけようと試みた。

(3) 郷土史料の発掘とインタビュー

1920 年に佐藤春夫が見た風景を具体的に再現するため、台湾・福建紀行作品に登場する舞台についての古写真・古地図を収集した。また、台湾の地政事務所に保管されている日本時代の地籍資料を活用することで、関連する建物の正確な位置や現況を確認した。さらに、郷土史研究家などの協力を得て、春夫の作品に登場する人物の子孫と面会、家伝資料からその経歴を復元することに努めた。ここでは、作品の批評性の由来を、人脈と情報源に遡って考察する新たな研究方法の確立を目指した。

４．研究成果

(1) 佐藤春夫没後 50 年展覧会の開催

2014 年は佐藤春夫没後 50 年の節目にあたり、和歌山県新宮市立佐藤春夫記念館で企画された展覧会「佐藤春夫と〈憧憬の地〉中国・台湾」（会期：2014 年 10 月 30 日～2015 年 2 月 15 日）に古写真資料を提供したほか、春夫の「外地」理解に大きく貢献した森丑之助（台湾原住民族研究者）、東熙市（新宮中学同級生で高雄の歯科医）、陳聰楷（東歯科への出資者で春夫の案内人）、鄭享綬（東歯科の助手で春夫の案内人）、許媽葵（台中州通訳）などの経歴について最新の研究成果を取り入れた説明パネルを作成。「アジア文学」の文脈から注目度が高まっている佐藤春夫研究の現在と未来の可能性を印象付けた。

(2) 『佐藤春夫読本』の刊行

佐藤春夫遺族、佐藤春夫記念館から資料提供を受け、本格的な専門解説書としては初の『佐藤春夫読本』を、辻本雄一氏（佐藤春夫記念館長）の監修、河野龍也（本研究代表者）の編著、佐藤春夫記念館の協力により、2015 年 10 月に勉誠出版より刊行した（全 400 頁）。

本書には、『群像』春夫担当編集者の大久保房男氏へのインタビュー（2014 年 4 月、牛山百合子・河野龍也）を掲載したほか、24 名の研究者に項目執筆を依頼し、特に春夫の幅広い文壇人脈が一望できる編集を試みた。河野は使用写真の選定やレイアウトの提案を行い、また本書全体の約半数のページの執筆を担当、「春夫文学入門」（評釈を含む春夫の経歴紹介）と「春夫文学のふるさと」（春夫文学の重要な 5 つの舞台で現地調査を行い、都市論的解釈の新知見を示したもの）を中心とする記事を掲載した。巻頭には下記の研究成果(3)(4)に挙げる新資料の写真版も収録し、研究資料集として高評価を受けた。

(3) 佐藤春夫日記の発見・紹介

本研究中に遺族宅で発見された佐藤春夫の少年時代の日記を、2015 年 4 月 7 日、佐藤春夫記念館に託して同館からメディア公開した。同日のＮＨＫニュースでテレビ報道された。この発見について調査を担当した河野龍也は、テレビニュースでの解説のほか、「佐藤春夫 11、12 歳の日記」（『読売新聞』4 月 21 日朝刊）、「父との駆け引きに魅力」（『毎日新聞』夕刊 5 月 14 日）の 2 つの解説文を執筆した。医師で俳人でもあった父豊太郎の、春夫に対する早期教育の実情が判明した。

(4) 太宰治書簡の発見・紹介

本研究中に、太宰治の春夫宛書簡 3 点（1935～36 年）が遺族宅で発見された。この新発見について関係遺族に説明の上、河野龍也が取材を受けた。2015 年 9 月 7 日、ＮＨＫニュースおよび毎日新聞夕刊 1 面で報じられた。報道が一般的関心を呼んだことから即日会見の必要が生じ、翌日の朝刊以降、全国新聞各紙に大きく取り上げられ、話題を呼んだ。

この資料には、太宰が春夫に芥川賞の授与を懇願する内容の書簡 1 点が含まれる。春夫がいわゆる「芥川賞騒動」の経緯を説明するため、作品「芥川賞」に引用した太宰書簡の実在が証明された。これにより騒動に関する春夫側の証言の信憑性が高まり、従来流通している春夫像には見直しが迫られることになった。河野龍也は解説文「80 年間の誤解を解く太宰治の“長い”手紙」（共同通信 1 月～2 月配信：全国各紙掲載）を寄稿し、資料の学術的価値を重視すべきことを説いた。

(5) 太宰文学碑建碑交渉書簡の発見・紹介

太宰治の小説「津軽」ゆかりの地に太宰文学碑を建立する計画が井伏鱒二から持ちかけられ、佐藤春夫が碑文の揮毫を引き受けるに至った経緯を示す書簡 3 通が、本研究の過程で、遺族宅などから発見された。内容は 2016 年 8 月 10 日付『東奥日報』朝刊 1 面に報道された。河野龍也はこの件に関する詳細なコメントを、『日本経済新聞』8 月 23 日夕刊、『産経新聞』8 月 29 日朝刊、『東京新聞』

9 月 5 日夕刊などに発表した。同碑は風化が進み、太宰治遺族が修復保存を希望していたもので、春夫・井伏・太宰の師弟関係を伝える文化遺産として、改めて碑の重要性を裏付ける発見となった。

(6) 大正期の芸術論を検証

佐藤春夫の大正期の活動を、3 件の論文で明らかにした。「画家の眼をした詩人の肖像」では、初期小説の世界観が後期印象派の絵画理論の影響下に成ったことを指摘した。「ハーンと大正日本の想像力」では、春夫の文体と文化論の基礎にラフカディオ・ハーンへの傾倒があることを論じた。「告白の相手は誰か」（入稿済）では、春夫の詩と小説との間に、メッセージの伝達先に対する意識の相違が存在することを指摘した。

(7) 昭和期の芸術論を検証

昭和戦前から敗戦直後に至る期間の春夫の活動を、2 件の論文ほかで明らかにした。「「詩人」と「小説家」の肖像」では、春夫が日本浪曼派の青年作家たちから敬慕された理由を、保田与重郎と蓮田善明の作家論から考察した。『“疎開者”佐藤春夫の“敗戦”』では、新資料の創作ノートを素材に、戦争詩人であった春夫が、「疎開者」という自己規定を通じて戦後文壇に復帰するプロセスを明らかにした。関連して『佐藤春夫読本』では、春夫が疎開中に使用したスケッチブックに書き留めてあった玉音放送の感想（新発見）を分析し、敗戦直後の衝撃がその後の執筆活動の中で余裕あるものへと虚構化されて行ったことを論じた。

(8) 近代精神の軌跡を検証

上記(6)(7)の考察内容を総合することで、春夫の芸術論の構造とその発展過程が判明した。春夫における「小説家」のイメージは、少年時代に影響を受けたニーチェの超人思想の変奏として成立している。一方「詩人」のイメージは、ハーンの影響下に、伝統的内面感覚への没入体験として成立している。

重要なのは、これらのジャンルの特質を、春夫が人間本来の「心」の二重構造（意識と無意識）に結び付けて理解していたことである。社会のアウトサイダーに共感することも、非常時に大衆を先導する「戦争詩人」を演じることも、春夫本人の中で矛盾なく同居し得たのは、彼がそもそも人の「心」に二面性を想定していたからだということが分かった。

後天的な文化体験を、先天的な本能へと読み替える文化遺伝説は、人間の「心」の構造を言葉でイメージする操作とある種の共犯関係を結ぶことで、普遍的な説得力を装っていく。これは春夫の場合のみならず、多かれ少なかれ近代日本の知性の一般的傾向として問題化できるはずだ。今後の課題は、春夫以外の多くの具体例を含めて、この見通しの妥当性を細部まで検証することにある。

(9) 新宮・台南・厦門での国際シンポジウム

2015 年 1 月 31 日、佐藤春夫没後 50 年展覧会に関連して、佐藤春夫記念館主催の国際シンポジウムを企画し、台湾原住民族研究の下村作次郎氏および中国の日本近代文学研究者である秦剛氏と共に共同討議を行った（来場者約 120 名）。河野龍也は「佐藤春夫が語らなかった台湾・福建」と題して本研究の成果を報告した。

この企画により、春夫文学を広くアジア近代の歴史的視座から捉えなおす気運に拍車がかかり、2016 年 6 月 4 日・5 日には下村氏の尽力により台南で「台日〈文學與歌謠〉國際學術研討會（日台「文学と歌謡」国際学術シンポジウム）」が、2016 年 6 月 25 日には秦氏の尽力により厦門で「〈东亚内部的自他认识〉学术研讨会（「東アジア内部の自他認識」学術シンポジウム）」が開催されるに至った。後者には企画段階から河野龍也も協力した。

いずれも討論の中心は佐藤春夫であり、河野はまず台南で、「佐藤春夫の台湾紀行を支えた人脈」と題する発表を行った。現存遺跡の指摘、現地通訳の経歴紹介、春夫と台湾原住民族研究との最初の接点についての指摘などがその内容である。次に厦門では「佐藤春夫が描いた厦門」と題する講演を行った。現地語の筆談メモが作品に活用された痕跡を検証し、春夫の異文化接触の最前線の驚きと困難とを明らかにした。

折しも厦門では、旧共同租界の鼓浪嶼（コロンス）を世界遺産登録するため、近代史を再検討する気運が急激に高まっており、春夫の紀行文『南方紀行』に関する河野の講演は新知見として注目を集め、その原稿はすぐさま中国語に翻訳されて現地の歴史研究誌に掲載された。

(10) 歴史家・関係者子孫へのインタビュー

2016 年、台湾の中央研究院に滞在し、佐藤春夫の台湾・福建紀行文に登場する場所の調査と、関係者子孫への取材を網羅的に行うことで、本研究の柱の一つである佐藤春夫の国際交流（「大陸」と「外地」）の状況を把握することができた。

まず、福建省厦門では、歴史家洪卜仁氏および黄禎良（『南方紀行』に登場）の親族と面会。また台湾では『南方紀行』の林正熊・徐朝帆、「殖民地の旅」の林資彬・呂如濤・許媽葵・鄭貽林、「女誡扇綺譚」の船問屋と酒楼経営者、「鷹爪花」の登場人物それぞれの子孫を訪問。春夫が台湾・福建で接触した人脈のネットワークを家族の証言から辿るとともに、古写真や家伝資料を記録し、彼らが貴重な情報源として、春夫の文化理解に多大な貢献を果たした事実を明らかにした。

(11) 文化遺産保護運動への貢献

佐藤春夫の台湾紀行文や創作の舞台を確定するため、本研究で初めて、地政事務所所

管の土地資料を活用する方法を試み、大きな成果をあげた。例えば「女誡扇綺譚」の船問屋について、土地文書と古地図、子孫の証言を総合し、春夫が訪ねた 1920 年当時の建物の状況を再現することに成功した。また作中の酒楼「酔仙閣」の一部が現存することも、この手法により発見することができた。

本研究の成果を反映させて作成した 1920 年当時の台南市街地復元図を、下にサンプルとして縮小掲載する。正確に特定された「酔仙閣」の位置を矢印で示した。右上の小字部分には、同図を収録した〔雑誌論文〕⑧の書誌が、引用にそなえ出典情報として記載されている。

【図】戦前の地籍図と商工案内を総合した 1920 年の台南市街地復元図の例（河野龍也）

以上は地元台南でも伝承が途絶えていた事実であり、文化財保護や文化交流の観点から重要な発見だったため、2016 年に国立台湾文学館に対して遺産の保全と周知活動への協力を要請した。

成果は蔡維鋼氏との国際共著論文「「女誡扇綺譚」の廃屋」にまとめ、まずは国内の研究誌に発表した。これを蔡氏が中国語に翻訳し、台湾の研究誌上に全文を紹介した。

台湾のメディアはすぐさま本研究のこの活動に関心を寄せた。2017 年 9 月 1 日、『自由時報』は「日治府城三大酒樓！「醉仙閣」傳出售／日學者貼文盼保存（日本時代台南の三大酒楼！「酔仙閣」の建物が売りに出る／日本の学者が保存を願って投稿）」と題する記事を掲載した。翌 9 月 2 日には、『中華日報』が、「醉仙閣舊建物擬轉售／日學者籲重視憂文學遺產台灣文化協會啟蒙地遭拆除（旧「酔仙閣」建物転売へ／日本の学者が台湾文化協会の活動舞台となった文学遺産の取り壊しを懸念して注意を呼びかけ）」と題する同様の報道を行った。

2018 年度の国立台湾文学館の展示「魔幻鯤島，妖鬼奇譚」には、河野・蔡の共著論文の拡大コピーそのものが展示されるなど、本件は台湾での歴史認識と文化遺産の保護活動に大きな役割を担うこととなった。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１０件）

① 河野龍也、画家の眼をした詩人の肖像：佐藤春夫「田園の憂鬱」論、日本近代文学、査読有、第 98 集、2018、162-177

② 河野龍也、ハーンと大正日本の想像力：佐藤春夫の場合、ヘルン研究、査読無、第 3 号、2018、55-63

③ 河野龍也、蔡維鋼、〈女誡扇綺譚〉的廢屋：從臺南土地資料的重新探討（蔡維鋼訳）、臺灣文學史料集刊、査読無、第 7 輯、2017、62-90（論文⑥の中国語訳）

④ 河野龍也、佐藤春夫笔下的厦门：围绕现场的经历和创作的风景（杜海怀訳）、鼓浪屿研究、査読無、第 6 輯、2017、106-119（発表⑥の中国語訳）

⑤ 河野龍也、佐藤春夫『南方紀行』の中国近代（四）：筆談が生んだ「誤解」、実践国文学、査読無、第 91 号、2017、54-71

⑥ 河野龍也、蔡維鋼、「女誡扇綺譚」の廃屋：台南土地資料からの再検討、成蹊国文、査読無、第 50 号、2017、11-26

⑦ 河野龍也、言語体験としての旅：佐藤春夫の「台湾もの」における「越境」、跨境：日本語文学研究、査読有、第 3 号、2016、83-95

⑧ 河野龍也、佐藤春夫の台湾滞在に関する新事実（二）：土地資料を活用した台南関連遺跡の調査、実践国文学、査読無、第 90 号、2016、24-44

⑨ 河野龍也、紀行から批評へ：佐藤春夫が台湾を描くとき、中央研究院人文社会科学研究中心専書、査読有、63、2014、63-85

⑩ 河野龍也、“疎開者”佐藤春夫の“敗戦”：詩稿が語るもの、日本近代文学、査読無、第 91 集、2014、167-175

〔学会発表〕（計１０件）

① 河野龍也、ハーンと大正日本の想像力：佐藤春夫を中心に、富山大学ラフカディオ・ハーン研究国際シンポジウム、2017

② 河野龍也、挿絵の中の故郷：佐藤春夫の新宮、絵入本学会、2017

③ 河野龍也、佐藤春夫の芸術観と「心」の問題、日本近代文学会、2017

④ 河野龍也、台湾における佐藤春夫：その人脈と訪問先の現在、日本台湾学会台北定例研究会、2017

⑤　河野龍也、台灣 1920 年、殖民地之旅：被人遺忘的佐藤春夫的足跡、中央研究院学術座談会、2017

⑥　河野龍也、佐藤春夫が描いた厦門：体験の現場と創作の風景をめぐって、「東アジア内部の自他認識」国際学術シンポジウム、2016

⑦　河野龍也、佐藤春夫の台湾紀行を支えた人脈：知られざる伏線・東其石、台日〈文学と歌謡〉国際学術シンポジウム、2016

⑧　河野龍也、言語体験としての旅：佐藤春夫の「台湾もの」における「越境」、「東アジアと同時代日本語文学フォーラム」台湾大会、2015

⑨　河野龍也、芥川龍之介「湖南の扇」の中国観：佐藤春夫との比較から、「湖湘文化与東亜交流」国際学術研討会、2015

⑩　河野龍也、佐藤春夫が語らなかった台湾・福建：残された足跡から作品を読む、佐藤春夫没後 50 年国際シンポジウム、2015

〔図書〕（計３件）

①　井原あや・梅澤亜由美・大木志門・大原祐治・尾形大・小澤純・河野龍也・小林洋介編、「私」から考える文学史：私小説という視座、勉誠出版、2018、印刷中

②　奥山文幸編、蓮田善明論：戦時下の国文学者と〈知〉の行方、翰林書房、2017、200-211

③　河野龍也編、佐藤春夫読本、勉誠出版、2015、口絵、6-18、30-196、381-382

〔その他〕
ホームページ等
偉大なる冒険者の世界―『佐藤春夫読本』刊行記念特集（本研究の成果としての出版物について）
http://bensei.jp/?main_page=wordpress&p=7873

６．研究組織
(1)研究代表者
河野　龍也（KONO, Tatsuya）
実践女子大学・文学部・准教授
研究者番号：20511827